

これからの 幼児教育を考える

これからの
幼児教育を考える

2009
夏

2009年5月20日発行 発行人 新井健一 編集人 後藤憲子
発行所 株式会社ベネッセホールディングス 次世代育成研究所
© Benesse Corporation 2009

表紙／裏表紙 下／P1 下／P.17 中・下／P.24
東京都小平市 ● 白梅幼稚園

裏表紙 上・中／P1 上・中／P.17 上
千葉県富津市 ● わこう村和光保育園

お問い合わせ先

0120-933-964

受付時間 10:00～17:00 (日曜・祝日は除く)

※通話料無料

※番号をよくお確かめのうえ、おかけください。

※携帯番号・PHSからご利用できます。

※上記番号に接続できない通信機器・回線の場合は、**086-214-6337**へおかけください(ただし通話料がかかります)。

インタビュー

幼保一体化と 新しい幼児教育

相互理解と連携の視点で考える課題と展望

汐見稔幸 ● 無藤 隆

白梅学園大学学長

白梅学園大学子ども学部教授

調査データ データから見る 幼児教育

保護者が幼稚園・保育所に期待すること

寄稿 全国の保育現場からの声

私が考える幼児教育のこれから

2 インタビュー

幼保一体化と 新しい幼児教育

相互理解と連携の視点で考える課題と展望

白梅学園大学学長 白梅学園大学子ども学部教授

汐見稔幸・無藤 隆



Takashi Muto

Toshiyuki Shiomi

10 調査データ

データから見る 幼児教育

保護者が幼稚園・保育所に期待すること

現在通っている園への満足度 …… 10

園選びで重視したこと …… 11

幼稚園・保育所への期待 …… 12

家庭でのしつけや教育方針 …… 13

しつけや教育の情報源 …… 14

子育ての悩みや気がかり …… 15

子育てやしつけに関する意識 …… 16

17 寄稿

全国の保育現場からの声

私が考える幼児教育のこれから

ベネッセ 次世代育成研究所 とは

少子高齢化、核家族化のさらなる進行、女性の社会進出、経済のグローバル化、ITによる情報化など、社会環境の変化が加速し、家族のあり方や親子関係を含めた子どもの育成環境に大きな変化が起こっています。

ベネッセ次世代育成研究所は、子育て世代の生活視点を大切にしながら、妊娠出産、子育て、保育・幼児教育、子育て世代のワークライフバランスを研究領域として、家族と子どもが「よく生きる」ための学術的な調査研究と体系的な理念の構築を行います。

また、その調査研究成果を子育て世代を支える産科・小児科などの医療機関、保育・幼児教育の専門家の方々に発信し、よりよい子育て環境を作る一助となることを目指します。

さらには、調査研究ネットワークを海外へも広げ、複眼的、学際的視点から日本の次世代育成を考えていきます。

刊行の言葉

今年度4月から、いよいよ改訂幼稚園教育要領・改定保育所保育指針が施行となりました。昨年3月の告示を受け、この1年は改めて保育のあり方を考える貴重な機会になったのではないのでしょうか。

ベネッセ次世代育成研究所では、幼児教育・保育の転換期である現状を踏まえ、「第1回幼児教育・保育についての基本調査」（07年に幼稚園、08年に保育所を対象）を実施しました。また、08年度は幼児教育に関するシンポジウムを東京、大阪、愛知、福岡で実施したほか、全国の幼稚園を対象に、本冊子「これからの幼児教育を考える」を3回にわたってお届けしてまいりました。

冊子に寄せられる現場の先生のご意見からは、今後ますます幼児期の教育が重要になってくる一方で、課題も多いことが分かってきました。今後、幼児期の子どもを取りまく環境をよりよくするためには、公立、私立、幼稚園、保育所はもちろんのこと、小学校、研究者、地域、保護者がその枠組みを超えて、知恵と力を出し合っていく必要があると考えます。

当研究所はそのような取り組みを推進する一助になればと願い、情報誌を全国の公私立幼稚園・保育所にお届けします。本冊子が幼児教育・保育に関わる皆様の日々の実践のご参考になれば幸いです。

2009年5月

ベネッセ次世代育成研究所



幼保一体化と新しい幼児教育

相互理解と連携の視点で考える課題と展望

白梅学園大学学長 汐見稔幸 ● 無藤 隆 白梅学園大学子ども学部教授

インタビュアー ● ベネッセ次世代育成研究所顧問 磯部頼子

09年度から、改訂幼稚園教育要領と改定保育所保育指針が同時に実施に移されました。

幼保の距離はますます縮まり、相互理解はもちろん、幼保合同研修などの具体的な取り組みの必要性も高まっています。

今回は、幼児教育と保育の現場に詳しく、関連著書も数多く上梓されているおふたりの先生に、

幼保一体化の進捗と、これからの幼児教育についてうかがいました。



左 汐見稔幸 先生

しおみ・としゆき ○白梅学園大学学長・東京大学名誉教授。専門は教育学、教育人間学、育児学。著書に、『子どもの学力の基本は好奇心です』（旬報社）、『「格差社会」を乗り越える子どもの育て方』（主婦の友社）など。

右 無藤 隆 先生

むとう・たかし ○白梅学園大学子ども学部教授、同大学院子ども学研究科長。文部科学省中央教育審議会委員などを歴任。専門は発達心理学・教育心理学。著書に『現場と学問のふれあうところ』（新曜社）など。

インタビュアー

磯部頼子 ベネッセ次世代育成研究所顧問、元全国公立幼稚園長会会長。

保育所の重要性は高まる一方「指針」改定で幼保が接近

磯部 本日はよろしくお願いします。まず、幼稚園教育要領と同時に、09年度に実施に移された新しい保育所保育指針についてうかがいたと思います。かなり大がかりな改定となりましたが、「第1回 幼児教育・保育についての基本調査（保育所編）」

の結果を見ても、現場では前向きなとらえ方が多いようです（図1・図2）。先生方のご実感を聞かせてください。

汐見 周知期間の昨年度、研修会などで保育所保育指針をテーマにすると、保育士の参加率がとても高かつ

たです。当初は改定内容に関心が集まっていましたが、後半になると、改定を受けて現場はどう変わるべきかといった具体的な課題をもつたがたが増え、積極的な姿勢がうかがえました。今回の改定は、子どもをより丁寧に育てたいという社会的な要請から、保育所の教育機能を強化することが目的のひとつです。自分たちの仕事ますます社会的な重要度を高めていることへの認識が、保育士の間に進んでいるのを感じました。

無藤 逆に、幼稚園教育要領は改訂が小さく、幼稚園関係者の説明会への参加率が低かったのが気になりました。確かに内容はあまり変わっていませんが、今後の幼児教育にとって重要なポイントがいくつも追加されています。保育所保育指針も新旧対照表を見ると、ものすごく変わったわけではありませんが、「保育課程」「保育所児童保育要録」といった新しい言葉が出てきたため、現場には少なからず混乱が広がっているようです。

汐見 今回、保育所保育指針が従来の局長通知から大臣告示に切り替わられて、幼稚園教育要領と同じレベルに引き上げられました。内容的にも幼稚園と足並みをそろえるために思い切った改定に踏み込んでいるのは評価できます。保育所にとっては、

図1 新保育所保育指針は、次のきっかけになると思いますか

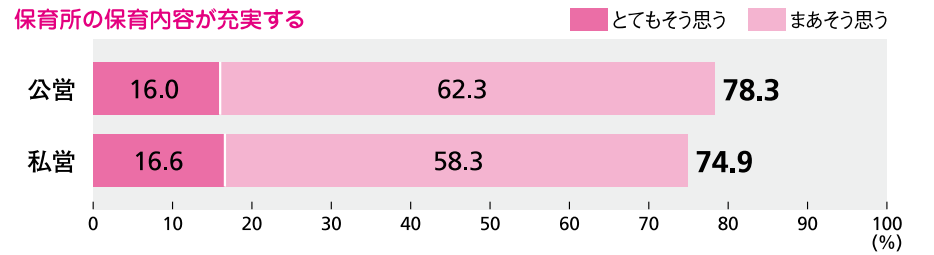
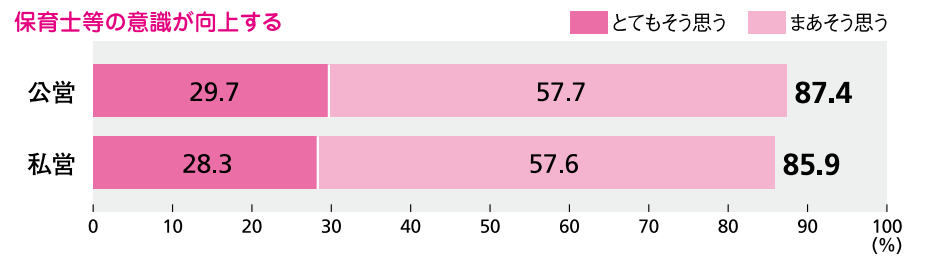
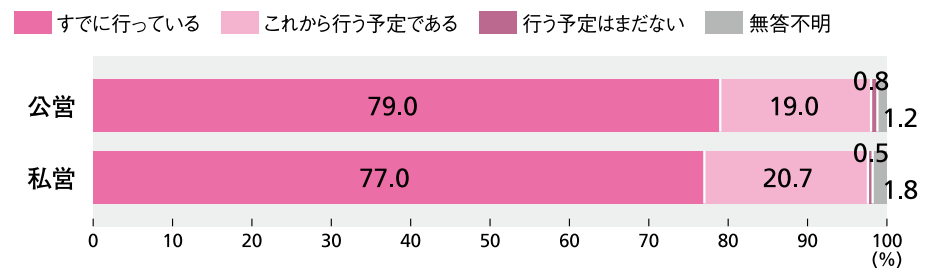


図2 新保育所保育指針について、貴園では、保育士等に内容の理解を深めるための取り組みを園として行っていますか



非常に大きな一歩と言えるでしょう。ただし、告示化から40年が経つ幼稚園教育の方が、研究や実践の面に蓄積があるのは事実です。保育所保育指針の「保育内容」に加えて保育士の皆さんは、幼稚園教育要領の解説書も一緒に読まれるといいと思います。具体的な実践のヒントを得られるはずです。

無藤 同感ですね。この改定によって幼稚園教育要領との整合性が取れましたし、保育所が幼稚園と同等の専門性を備える機関に位置づけられたのも前進と言えるでしょう。しかし、やはり私も文部科学省と厚生労

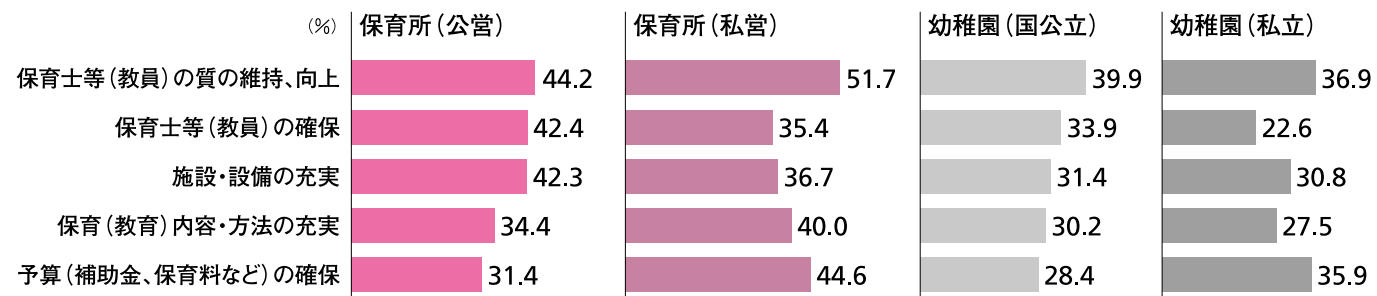
働省の違いを感じました。文科省は改定にあたって何年も前から研究や実践を積み上げるため、いざ告示の際には「ああ、あの件ね」と、既に広く知られています。ところが、厚生労省の場合、現場は告示後に多くの勉強が必要となり、混乱を招きやすい。今後、厚生労省を中心に保育所の研究体制を充実させていく必要があるでしょう。幼稚園は公立だけでなく、08年度から、全日本私立幼稚園連合会も研究体制の確立に向けて本格的に動き出していますので、モデルにしてもよいと思います。

本コーナー掲載のデータについて ●保育所のデータは「第1回 幼児教育・保育についての基本調査（保育所編）」（監修 汐見稔幸先生）より。調査時期／2008年9月～10月 調査対象／園児数30人以上（一部、園児数不明の園も含む）の認可保育所の所長・施設長（園長）、副所長・副施設長（副園長）、主任 サンプル数と回収率／公立1584（26.4%）、私立1434（23.9%）※本冊子のサンプル数は、公営（公設公営）1540園、私営（民設民営、公設民営）1478園 ●幼稚園のデータは「第1回 幼児教育・保育についての基本調査（幼稚園編）」（監修 無藤隆先生）より。調査時期／2007年6月 調査対象／園児数30人以上の国公私立幼稚園の園長・副園長（教頭）、主任 サンプル数と回収率／国公立401（28.2%）、私立1203（21.2%）

幼保一体化と新しい幼児教育 相互理解と連携の視点で考える課題と展望

白梅学園大学学長 汐見稔幸 ● 無藤 隆 白梅学園大学子ども学部教授

図3 貴園の保育実践上、運営上の課題についておたずねします



※「とてもあてはまる」の割合。全21項目中、公営保育所の数値が高い上位5項目を抜粋
※項目の()内は、幼稚園調査で使った文言

専門性を求められるこれからの保育士 各園でのPDCAサイクルの確立が不可欠

磯部 次に、改定を受けて、保育士はどう対応すべきか、ご教示をいただければと思います。

汐見 これまで以上に責任をもった仕事をする、言い換えれば専門性を高める必要があります。具体的に言うと、「預かって返す」という意識ではなく、子どもの将来をイメージして、卒園までに育てたい力を明確な目標に表し、その達成に向けた計画を立てる。そして、実際に計画通りに育っているかを評価し、計画を絶えず改善する。そのように、目標から改善までの一貫したサイクルをきちんと保つことが大切です。従来も保育目標があったはずですから、まずは見直しの作業から進めてほしいですね。自己評価や第三者評価も単独で行うのではなく、目標達成のサイクルの一部に組み入れることが大事です。

磯部 保育所は保育が長時間にわたるため、研究や話し合いの時間が取りにくいという制約がある場合もあります。それを踏まえ、具体的な実践のヒントをいただけますか。

汐見 私が申し上げたサイクルを確立するには、子どもの様子の記録が不可欠です。評価の際に記録がなければ実践を振り返れませんから。限られた時間で記録に取り組む工夫として、ある園では毎週月曜日の17時から事例検討会という話し合いを行っています。長文の記録を書くのは大変なので、参加者が感動したこと、悩んだことなどのエピソードをもち寄って発表し合うという取り組みです。保育士の忙しさに配慮し、強制ではなく、任意参加としています。じっくりと観察しなければ、エピソードは見つかりませんから、これだけでも子どもへの理解はかなり深まります。あまり時間のかからない、保育所型の取り組みと言えるで

しょう。

無藤 確かに、保育記録は非常に重要で、私は記録も保育の一部という考えです。保育所に比べると、幼稚園の方が記録に力を入れているわけではありません。保育士も幼稚園教諭も、記録の大切さを改めて認識していただきたいと思います。時間の確保が難しいときは工夫も必要です。指導計画の脇に赤字で書き足してもいいですし、カメラやビデオで子どもの姿を撮影するのも立派な記録です。こうした実践は、厚労省や文科省の指導ではなく、現場レベルのアイデアを広げていけるとよいのですが。

汐見 記録は保育の一部という考えには深く共感します。年度末の評価だけではなく、日々の保育の反省材料になりますし、どこに目を向けるかという点では保育士や幼稚園教諭の能力にもかかわってくる。蓄積すれば、園の財産にもなると思います。

保育士や教諭の質の維持・向上が 幼保ともに大きな悩みの種

磯部 調査では、幼保・公私ともに、課題として「保育士等(教員)の質の維持・向上」が最も多く挙げられました(図3)。この課題に対しては、

どのようなアプローチが有効でしょうか。

無藤 まず考えられるのは、研修の充実です。文科省と厚労省には研修の枠組みに大きな違いがあり、幼稚園教諭の場合、初任者研修をはじめ、養成所を卒業した後の研修システムが整っています。ところが、保育士は養成課程で一人前に育てるから社会に出た後は研修が不要という考え方。しかし、10年経っても初任者と同じレベルでは困るわけですから、厚労省には年次を追った研修について検討してほしいと思います。

汐見 とは言え、保育士は長時間保育ですから、園外研修に出るのが難しいのが悩ましいところです。パートスタッフをはじめとした非正規雇用の割合も増えていますし(図4)。研修の充実には、そのパートスタッフの研修制度も整えなくてはならないと思うのですけどね。

無藤 そのためには園内研修の活用も有効です。互いに保育を見せ合い、改善すべき点について話し合う取り組みは非常に有意義です。ビデオに撮影して後で一緒に観る方法でもか

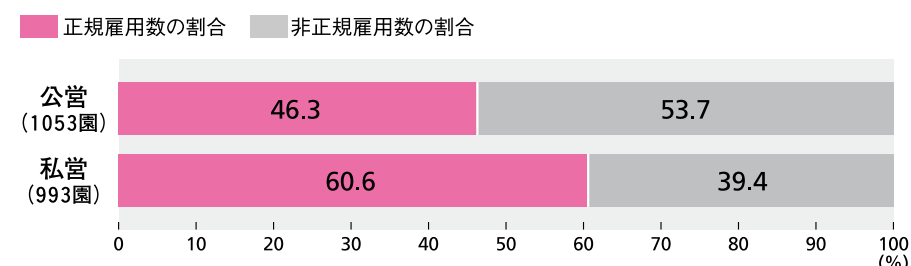
まいません。その際にポイントになる視点は、そのときどきの保育で、「養護」という情緒の安心を確保し、活動に集中する「教育」を可能にしていきます。数分間の保育の中にあっても、養護と教育が一体的に充実していく様子を見て取れます。そしてもうひとつのポイントは、評価の取り組みにも重なりますが、子ども

の育ちをきちんと見極めることです。数字で表せない難しさはありますが、子どもが年齢ごとにふさわしい姿を示しているかを5領域のすべてについて検証する必要があります。その結果を、保護者や小学校、さらに広い意味での世間に対して発信することにより、保育所や幼稚園の教育への理解を深められます。

磯部 幼保の合同研修も重要になると言われています。

汐見 これは口で言うほど簡単ではないというのが、私の感想。幼保が互いに学び合うのが大切であることに異論はありませんが、壁は高いと感じます。子どもへのかかわり方が違うことを、まず両者が理解して、共有し合う必要があるでしょう。例えば、「遊び」と言っても、幼稚園

図4 保育士数の合計と、雇用形態別の内訳人数をおたずねします



※設問では「正規(契約期間の定めがない)雇用数」と「非正規(雇用期間を設けている)雇用数」をたずねている
※正規・非正規の保育士数合計と、雇用形態別人数の合計が合致したサンプルのみを分析
※各園の割合の平均値

幼保一体化と新しい幼児教育

相互理解と連携の視点で考える課題と展望

白梅学園大学学長 汐見稔幸 ● 無藤 隆 白梅学園大学子ども学部教授



教諭と保育士が抱くイメージは異なりますし、傾向として、幼稚園教諭は子どもの遊びへの口出しを控えますが、保育士は「一緒に遊ぼう」と言われたら、あまり断りません。こうした違いは、幼稚園は教育的機能、保育園は生活的機能を重視してきた長い歴史から生まれたのでしょう。

無藤 まずは幼稚園と保育園どちらも、お互いの考え方をリスペクトすべきでしょうね。冷静に話を聞き合うと、どちらも、もっともなことを

言っているのですから。幼保それぞれの保育について学び合えるのは、合同研修の大きなメリットです。認定こども園はまさに幼保のぶつかり合いの場ですが、双方が努力して学び合うことで、2、3年ほどするとうまくまとまることが多いです。これからの10年間で幼保一元化が完全に実現するかどうかはわかりませんが、その方向に近づいていくのは確かですから、相互理解の重要性はますます高まるでしょう。 ✓

スペースの使い方の差に表れる 保育に対する幼保の発想の違い

磯部 幼稚園に比べ、保育所では「施設・設備の充実」を課題とする割合が高い(4ページ図3)ことについては、どのようにお感じになりますか。

無藤 確かに、施設により保育が制

約されるケースは多いです。建物の広さなどの基準が幼稚園と大きく変わるわけではありませんが、保育所は活動だけでなく、食事や昼寝があるため、部屋の使い方が異なります。

幼稚園の場合、例えば工作途中の材料を出したままにして翌日に再開するのは普通です。ところが、保育所では布団が敷けないため、いちいち片付けなくてはいけない。すると、準備室に遊具があるのに、片付けるのが大変だからといつの間にか出さなくなる、ということになる。また園庭のない保育所では、散歩が外遊びになりますが、天候に左右されますし、近所に花を摘んで良い公園がなければ自然とふれ合う機会が限られてしまうなど、何かと不自由が多い。こうした制約は保育所のつらいところですよ。

汐見 空間の使い方では、幼稚園は教育機関、保育所は福祉機関だったため、過ごし方に発想の違いがあるのでしょう。保育所は教育の場というよりは生活の場であり、日本のお茶の間と同じく、ひとつの部屋でご飯を食べて、団らんして、寝るといふ使い方をします。部屋が豊富にあるのに越したことはありませんが、今の財政事情では難しい要望ですから、保育所側が工夫するしかありません。

無藤 ただ、都心部はともかく、地方にはスペースにゆとりのある園も少なくありません。それなのに、必ずしもじょうずに活用していないケースもあるようです。せっかく広いスペースがあるのに、狭い園に適した過ごし方をしていることが多々あります。全国的には、現在の施設や設備のままでも、まだ改善の余地は大きいと言えそうです。

園の能力のバロメータとなる 保護者に対する説明能力

磯部 ほかに保育所における保育についてお考えはありますか。

無藤 これは施設長の方針によるのですが、最近は安全に対する意識が過剰なケースが目立ちます。ハサミを使わせないなど、そういう類の細かい園内規則もあるようですが、もう少し、ゆるめてもよいのではと感じますね。

汐見 せっかく栽培した野菜を食べさせないとか、イチゴを熱湯で消毒してから口に入れさせる園の話を聞いたことがあります。保育所は親の生活を支えるわけですから、「預かって無事にお返しする」ことを最優先する意識があることは十分理解できます。しかし、度が過ぎれば、走り回るのも危険で何もさせないのが安全ということになるでしょう。幼いときには小さいケガをすることも学びだという、良い意味での教育的配慮を忘れたくないものです。

無藤 蚊に刺されたと保護者から苦情が来るため、なるべく外に出さず、自然とふれ合える草むらを刈り取ってしまったりと、学びの機会が失われるケースも見られます。

磯部 保護者にきちんと説明し、理解を得ることが必要だということでしょうか。

汐見 そこは、まさに保育所の能力が問われる部分です。「私どもの園

では小さなケガをすることもあるかもしれませんが、元気に、たくましく育ちますので安心してください」と、保護者に説得力をもって話し、納得してもらえるかですね。

磯部 そういうスタンスは、幼保どちらの園にももってほしいですね。そして、保護者の理解を得るためにも、明確な保育目標が必要ですね。

汐見 そうです。しかし、多くの保育所には保育目標があるものの、皆で話し合ってつくられたものは少なく、あまり認知されていないことが多いようです。

無藤 保育所の「直接契約」が現実になれば、保育所側は否応なしに「見られること」を意識せざるを得くなります。そうなれば、保育目標の検討や発信の仕方も変わってくるでしょう。いずれにしても、保育課程はつくって終わりではなく、改善しながら生きたものにしていくのだということを忘れずにいたいですね。

磯部 今、お話に出た直接契約につ

いて、少しご意見を聞かせていただけますか。

汐見 保護者が保育所を選ぶことはひとつの権利だと思います。今後、この権利が担保される方向に進むのは避けられないでしょう。しかし、同時に、保育所が子どもを選抜することによって生じる問題には、行政がきちんと配慮してほしいと思います。さらに、当然、不人気の園も出るでしょうから、子どもが集まらない原因を分析して改善するシステムなど、総合的な枠組みを用意してほしいと思います。

無藤 おおむね同意見ですが、実質的には各園には補助金が入りますから、現在のように、優先されるべき子どもが優先される状況は、大きくは変わらないと、私は考えています。点数制度が残るかどうかはわかりませんが。保育所に子どもが選抜される問題も指摘されていますが、今も幼稚園は抽選や先着で選抜しているわけですし、それほど心配しなくてよいと思います。ただし、保育所が交通の便利な場所に増えたり、建物などの見栄えにより人気が左右されたりする影響が出るのはしかたのないことでしょう。

子どもの育ち方は「幼保」の差よりも 「園」の差の方がはるかに大きい

磯部 幼稚園や保育所でどのような一斉の活動を行っているかを調査し

たところ、幼保や公私立によって違いがありました(次ページ図5)。

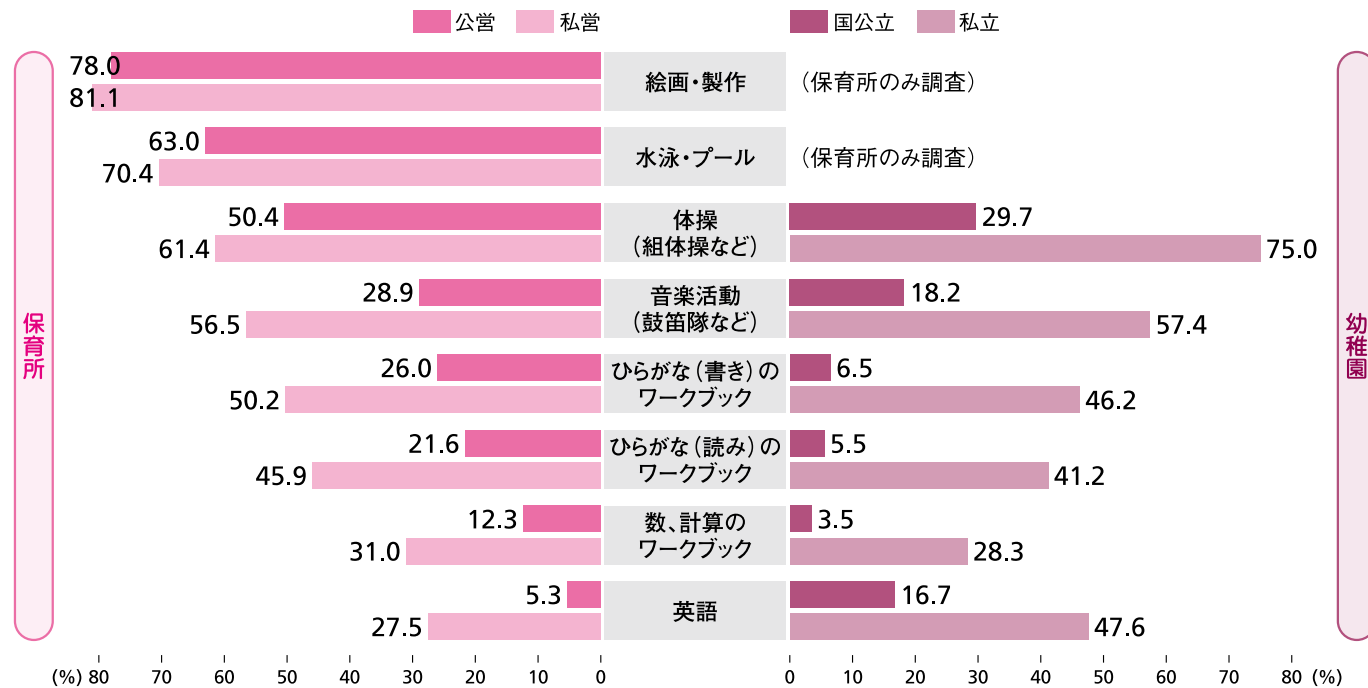
幼保一体化と新しい幼児教育

相互理解と連携の視点で考える課題と展望

白梅学園大学学長 汐見稔幸 ● 無藤 隆 白梅学園大学子ども学部教授

図5

保育所ではさまざまな保育活動が行われていますが、特に、通常の保育の時間にクラス全員で下記のような活動を一斉に行っていますか



※幼稚園の調査では、「Q.教育課程内の時間に学級全員が一斉に行う活動についておたずねします。」という設問である
※「行っている」の割合で、公営保育所の数値が高い順

無藤 幼保の差より、園による差の方がはるかに大きいと思います。同じ幼稚園でも、ショックを受けるくらい差があるのが現実です。

汐見 私も同意見です。原則として、幼稚園は4時間、保育園は8時間くらいの間に保育目標を達成します。ですから、進め方に違いはありますが、経験上の差はあまりないようですね。

磯部 幼稚園や保育所における「遊び」について、保育者が意識すべき点などをうかがえればと思います。

汐見 工夫や発見など、いろいろな意味での知的活動が組み込まれているのが、保育における「遊び」と言えます。例えば、アリの巣を見つけ、掘ってみるといった活動を指します。こうした遊びは、小学校の学習への橋渡しになりますが、うまく興味を持続させないと、知的活動の機会が失われてしまう。かといって、

不自然な流れで興味を引き出そうとすると、学校の勉強と変わらなくなってしまう。

無藤 子どもの知的活動は、さまざまな場面で生まれています。保育者はまず、それを見つけられなくてはなりません。そのためには、実践の振り返りとともに、保育者自身が教材や環境について勉強することも必要でしょう。例えば、アリとだんごむしの足の本数が違うことを保育者が知らなければ、子どもにそれを気づかせられず、昆虫のおもしろさを目覚めさせる機会を逃すかもしれません。また、子どもの多くは昆虫図鑑などが好きですが、図鑑で得た知識と日常生活の中のことは、あまりつながっていません。そこをつなげるのが、保育者の役目ではないでしょうか。

汐見 その通りだと思います。保育者には、子どもがおもしろがる誘導

の仕方を研究していただきたいと思います。

磯部 記録に関する話の中にも出てきましたが、やはり子どもをよく見ることが大切なのですね。

無藤 ある園では、1年を通して小川に散歩して、川べりで遊ばせています。季節による水温や生物の変化を体験でき、とても有意義な知的活動になっているようです。この園も、かつては安全性を意識して、川では遊ばせず、1列に並んで散歩していたそうです。保育者が発想を変えれば、子どもの学びも大きく変わるのです。

汐見 知育というと、文字や数字に関心が傾きがちですが、川遊びで虫を捕まえたときも、「餌は何をあげようか」「卵はどんな形なのかな」など、次々に発想が広がっていくものです。そういう体験が興味の源になるのでしょうか。



楽観できない日本の幼児教育の将来 根本的な発想の転換が必要

磯部 現在、「子ども省」創設の構想もあるようですが、今後の幼児教育を巡る政策は、どのような方向に進むとよいとお考えでしょうか。

汐見 十数年前に書いた『幼児教育産業と子育て』（岩波書店）という本の中で、3歳児からの「義務保育」、さらに家庭と子どもをともにサポートする「子ども・家庭省」の設置の必要性を主張しました。もちろん、保育所や幼稚園の教育的機能の質を高めるのも大事ですが、子どもの背後にある家庭は、必ずしも理想の家庭ではありませんから、福祉的なサポートも不可欠です。教育と福祉を分けしないで、ひとつの理念の中に統合し、両方の機能を備えた保育を目

指すべきだと、私は一貫して唱えています。

無藤 そうですね。小中学校の学力テストを通し、家庭や地域の格差の問題が浮かび上がってきました。こ

の問題は、まだ見えてこないだけで、乳幼児にもあると考えるのが自然です。そこへの支援は、まさに教育と福祉の重なる部分であり、「子ども省」かどうかはともかく、大きな枠組みで取り組む必要があるでしょう。

汐見 幼児教育を巡る政策には政治情勢も密接に絡んでおり、今後3年くらいは混迷するかもしれません。しかし、その間にヨーロッパや東アジアの国々に水を開けられるおそれがあります。OECD加盟国では保育・幼児教育の予算は対GDP比1%が目標とされています。フランスをはじめ複数の国々がクリアするなか、日本は0.3%に過ぎません。現行の予算の3倍ですから、かなり高い水準ですが、現代社会ではそれくらいの投資がなければ、子どもはきちんと育たないというのが、先進諸国の一致した意見なのです。日本も幼児教育に対する考え方をもっと根本的に変えるべきでしょう。

磯部 大変貴重なお話をいただきまして、ありがとうございました。

現場の皆さんへ

汐見先生より

◎保育所に対する社会の期待が高まっているのは、ここ数十年の間、保育所ががんばってきたからにはほかならないと思います。保育士も幼稚園教諭も、これまでの蓄積を生かしながら、より一層、保育の内容や質を向上させてくれるものと期待しています。

無藤先生より

◎自分の受けもつ子どもたちの姿をよく見て、明日、来週、来月と、先を見すえて改善するように心がけてください。上から与えられた仕事と感じたらつらいと思いますが、自分が大事に育てる子どもの将来のためにがんばるのは、とても楽しいことだと思います。

※このインタビューは2009年2月に行われました。

保護者が幼稚園・保育所に 期待すること

今、保護者は、幼稚園や保育所にどのようなことを期待しているのでしょうか？そして、保護者のしつけや教育への意識はどのように変化しているのでしょうか？ Benesse教育研究開発センターでは、2008年9月に幼稚園と保育所に通っている子どもをもつ保護者を対象に、家庭での子育て生活の実態、しつけや教育に関する意識について調査を行いました。ここでは、幼稚園・保育所に期待されることや、子育ての悩み、しつけに関する意識などを取り上げ、保護者の意識の変化を見ていきましょう。

今回ご紹介するデータの調査概要

調査名 第3回 子育て生活基本調査（幼児版）
調査テーマ 幼稚園児・保育園児をもつ家庭での子育ての実態、およびしつけや教育に関する保護者の意識をとらえる
調査方法 幼稚園・保育園通しによる家庭での自記式質問紙調査
調査時期 第2回調査2003年9月～10月／第3回調査2008年9月～10月
調査対象 首都圏（東京都、埼玉県、千葉県、神奈川県）、地方市部、地方郡部の幼稚園児・保育園児をもつ保護者のうち、首都圏の母親（2003年：3,477名、2008年：3,069名）を中心に分析。
【サンプル数】

	年少児	年中児	年長児	不明
2003年（首都圏・母親3477名）	752名	1,332名	1,370名	23名
2008年（首都圏・母親3069名）	767名	1,115名	1,141名	46名

※2003年と2008年の選択項目には、一部表記上の変更があります。

調査名 第1回幼児教育・保育についての基本調査（保育所編）
調査テーマ 2008年3月告示の保育所保育指針への保育所の対応と、保育所における保育の実態・課題を明らかにし、改善の方向性を探ること
調査方法 郵送法（自記式アンケートを郵送により配布、回収）
調査時期 2008年9～10月
調査対象 全国の園児数30人以上（一部、園児数不明の園も含む）の認可保育所の所長・施設長（園長）、副所長・副施設長（園長）、主任 ※乳児のみの保育所は除く
【サンプル数】

	合計	公立	私立
発送数	12,000件	6,000件	6,000件
有効回答数	3,018件	1,584件	1,434件
回収率	25.2%	26.4%	23.9%

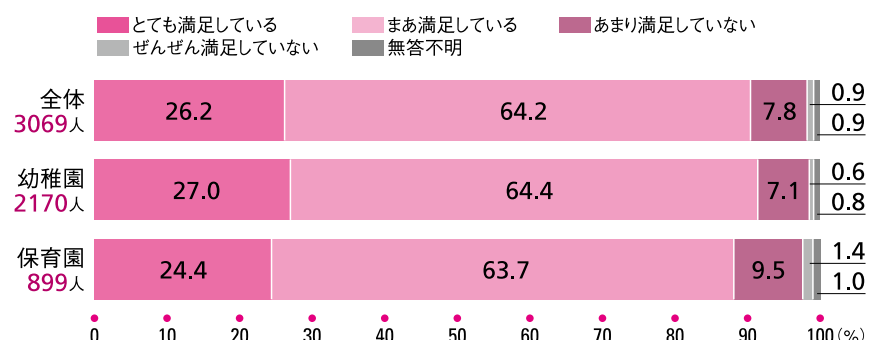
・12ページ図4は「第1回幼児教育・保育についての基本調査（保育所編）」、そのほかは「第3回子育て生活基本調査（幼児版）」より

現在通っている園への満足度

幼稚園・保育所ともに約9割が「満足している」

Q お子様に通われている園の取り組みや指導にどのくらい満足していますか

図1 現在通っている園への満足度（2008年首都圏・就園状況別）



注1 園への満足度は2008年の調査で初めて加えた項目のため、経年で比較することはできない。

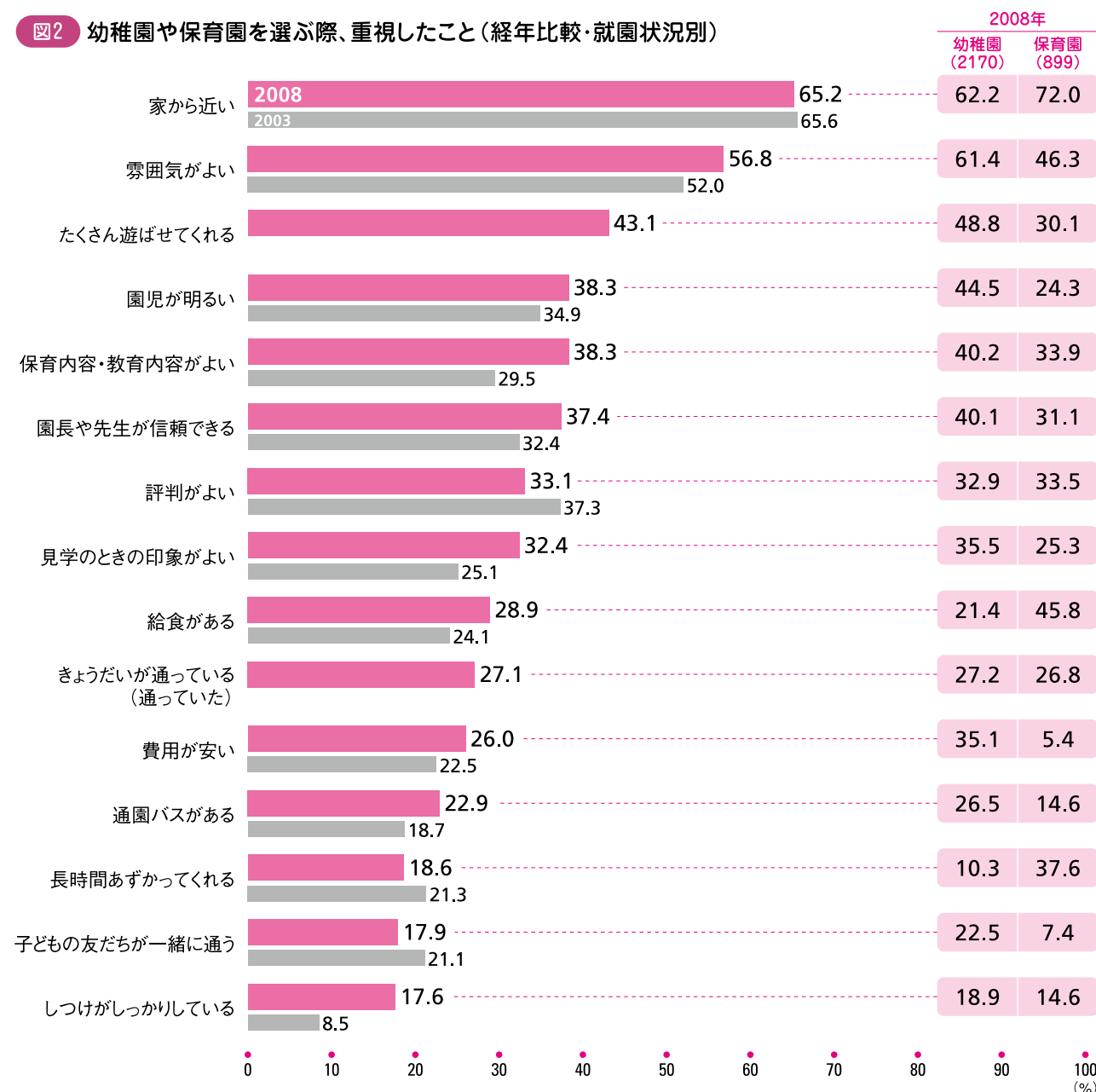
★今回の調査では幼稚園または保育所に通う3歳～6歳の子どもをもつ母親に現在の園への満足度を尋ねました。その結果、「とても満足している」「まあ満足している」を合わせると、約9割の母親が、現在子どもが通っている園に満足していることがわかりました。日ごろの取り組みが評価された結果と言えるのではないのでしょうか。

園選びで重視したこと

保育・教育内容を自分で確かめて選ぶ母親が増加

Q お子様の通う幼稚園や保育園を選ぶときにどのようなことを重視しましたか

図2 幼稚園や保育園を選ぶ際、重視したこと（経年比較・就園状況別）



注1 複数回答。「その他」を含む23項目のうち、15項目を図示した。

注2 「お子様の通う幼稚園や保育園を選ぶときに、どの園にするかを考えましたか」の質問で、「よく考えた」「まあ考えた」と回答した人のみ分析した。

注3 2003年の数値がない項目は2008年の調査より新たに追加された項目。

★幼稚園や保育所を選ぶときに重視したことを尋ねたところ、2003年に比べて全般的に項目の選択率が増えていることが特徴です。特に増加幅が大きい項目は「保育内容・教育内容がい」「園長や先生が信頼できる」「見学のときの印象がい」「しつけがしっかりしている」

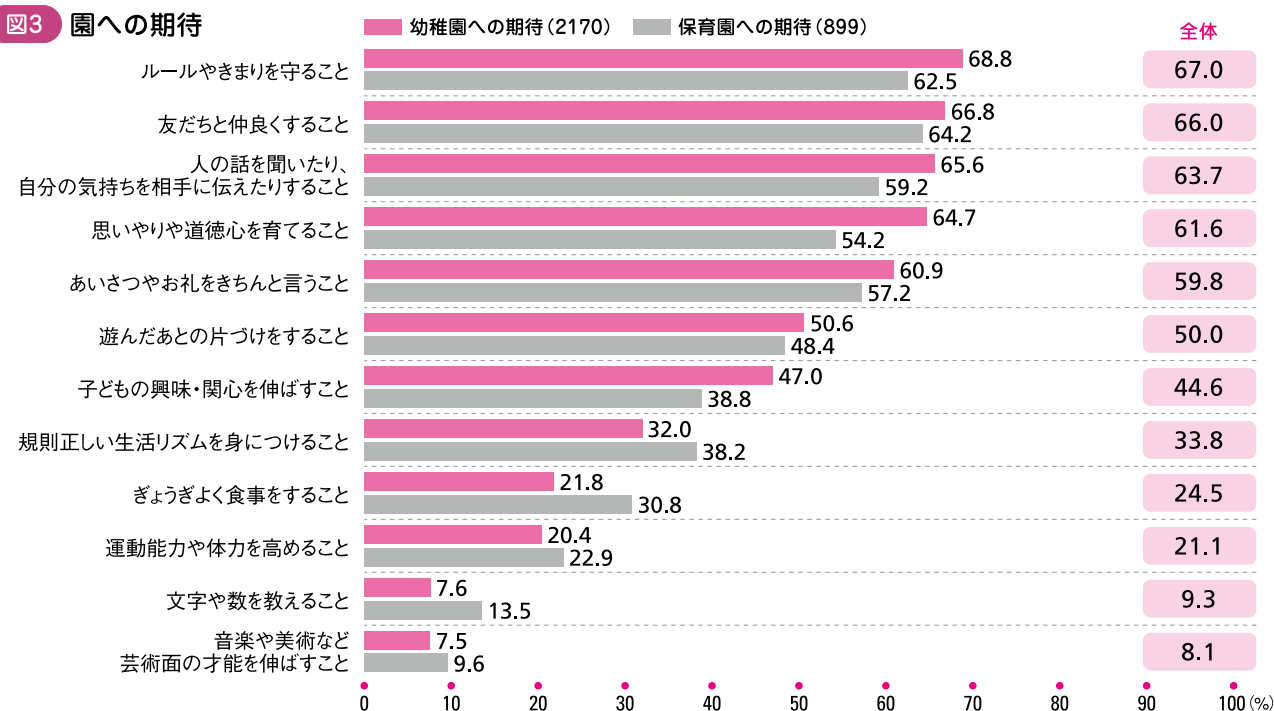
です。自分の目で保育・教育内容や先生の印象を確かめて園を選ぶ保護者が、増えてきたと言えるのではないのでしょうか。

幼稚園・保育所への期待

幼稚園へは思いやりを育てること、保育所へは生活習慣を身につけることを期待

Q あなたは、幼稚園・保育園に対して、次のようなしつけや教育をどのくらい期待しますか。

図3 園への期待



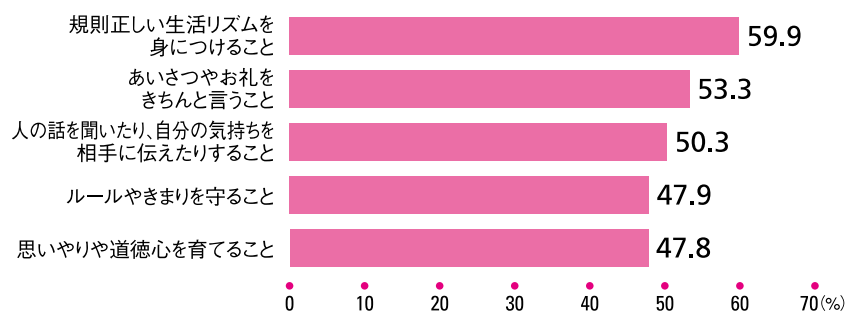
注 「とても期待する」の％

★幼稚園や保育所に対してどのようなしつけや教育を期待するかと尋ねたところ、上位3つの項目は幼稚園・保育所ともに「ルールやきまりを守ること」「友だちと仲良くすること」「人の話を聞いたり、自分の気持ちを相手に伝えたりすること」となりました。就園先別で比較

すると、幼稚園の比率が高いのは「思いやりや道徳心を育てること」「子どもの興味・関心を伸ばすこと」などの項目で、保育所の比率が高いのは「ぎょうぎよく食事をすること」「規則正しい生活リズムを身につけること」などでした。

Q 保育所向け あなたは、3歳以上の園児の保護者に対して、次のようなしつけや教育をどのくらい期待しますか。

図4 保育所が3歳以上の園児の保護者に期待すること(上位5つ)



注1 基本調査(幼稚園編)にはない項目のため、幼稚園を比較することはできない。

注2 「とてもあてはまる」の割合

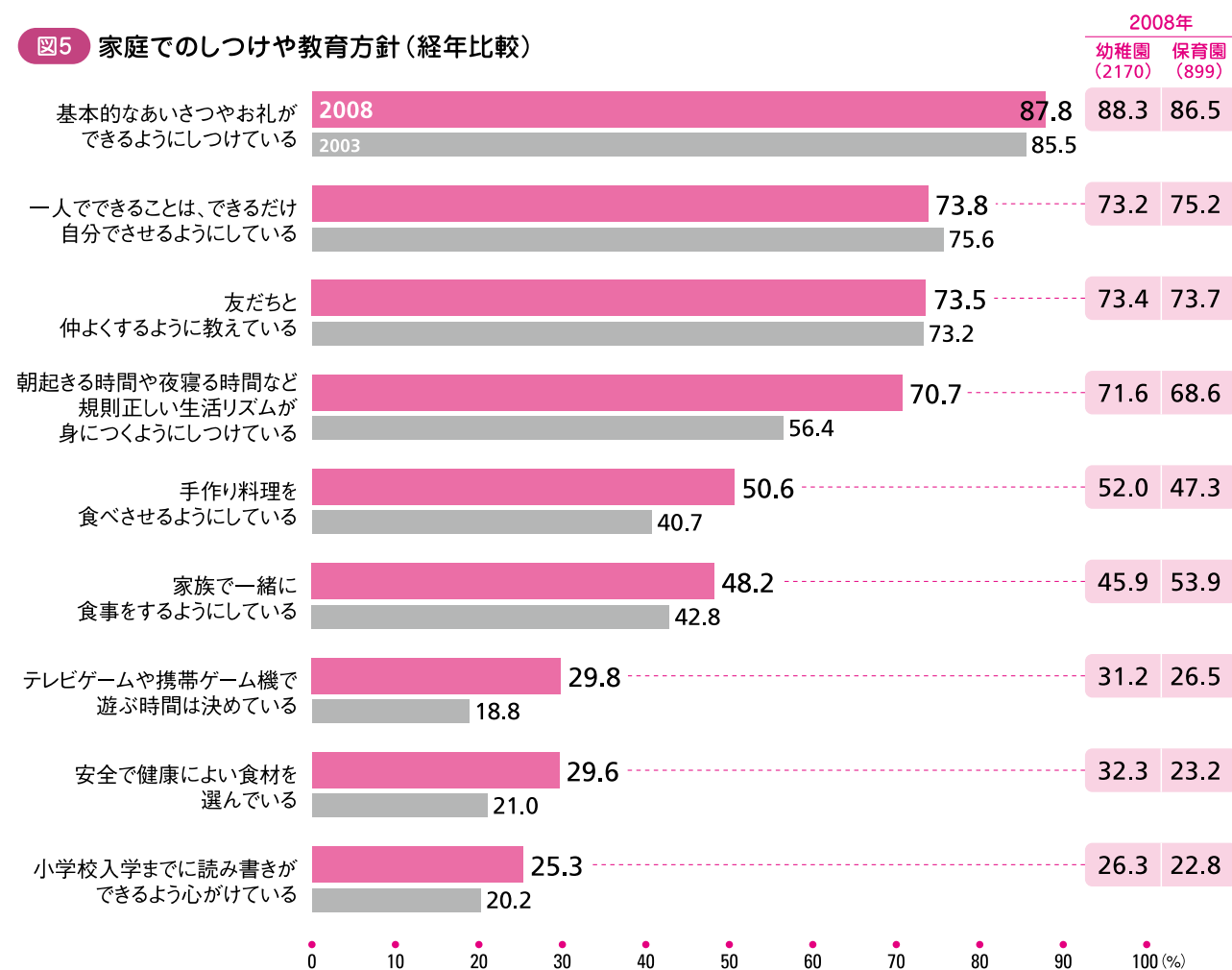
★一方、ベネッセ次世代育成研究所が2008年9・10月に実施した「第1回幼児教育・保育についての基本調査(保育所編)」(調査概要は10ページを参照)において、保育所から3歳以上の園児の保護者に期待することは、上から順に「規則正しい生活リズムを身につけること」(59.9%)「あいさつやお礼をきちんと言うこと」(53.3%)「人の話を聞いたり、自分の気持ちを相手に伝えたりすること」(50.3%)でした。

家庭でのしつけや教育方針

家庭でのしつけや教育を心がける母親が増えている

Q あなたのご家庭ではお子様を育てていく上で、とくに心がけていることがありますか。

図5 家庭でのしつけや教育方針(経年比較)



注 複数回答。「その他」を含む19項目のうち、9項目を図示した。

★家庭でのしつけや教育方針について、5年前に比べて多くの項目で選択率が上昇していることがわかりました。特に「朝起きる時間や夜寝る時間など規則正しい生活リズムが身につくようにしつけている」「テレビゲームや携帯ゲーム機で遊ぶ時間は決めている」「手作り料理を

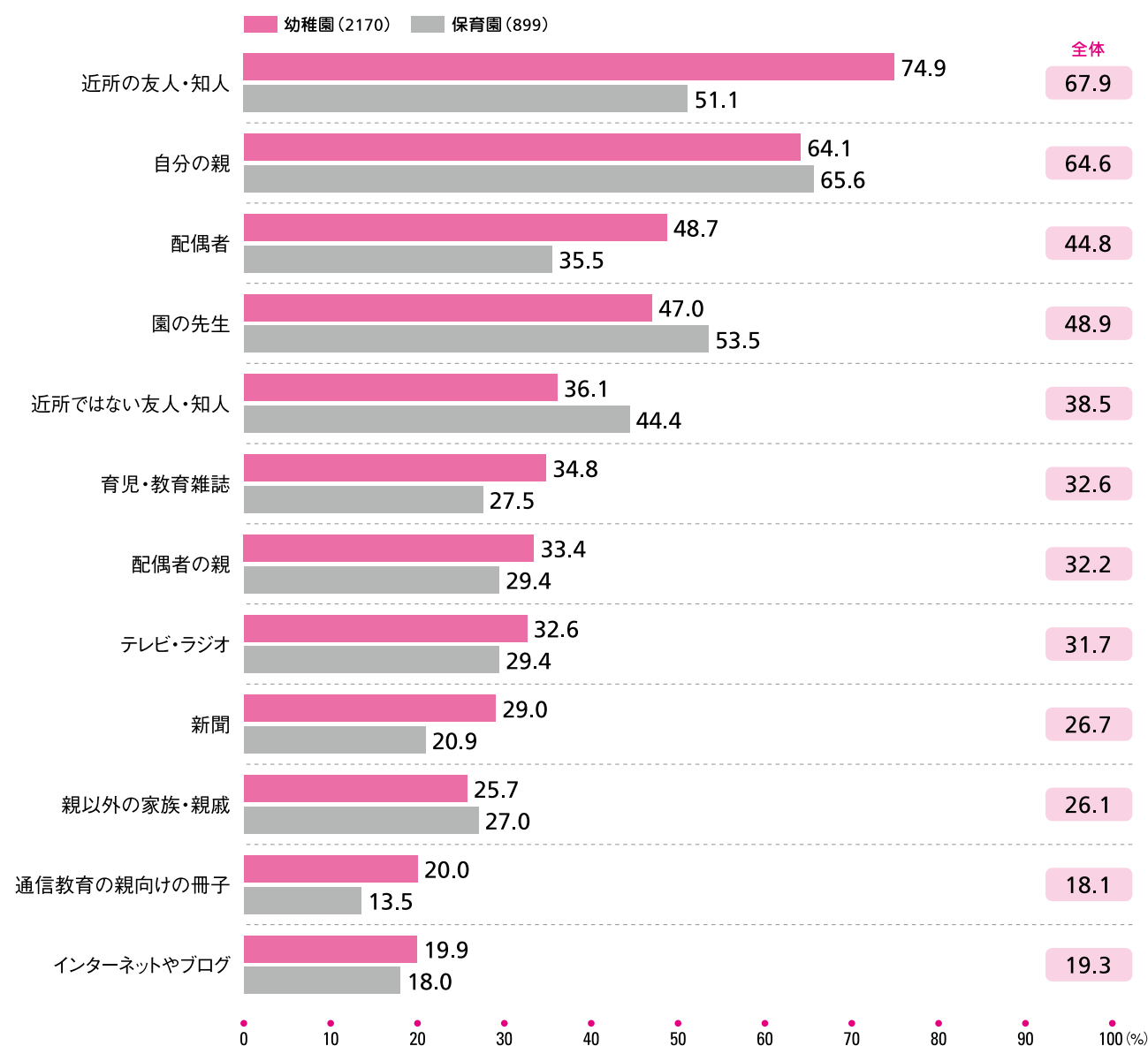
食べさせるようにしている」は、5年前より10ポイント程度増えています。また「基本的なあいさつやお礼」「一人で行えることは、できるだけ自分で」「友だちと仲よく」といった項目は5年前と同様に選択率が高いことがわかりました。

しつけや教育の情報源

幼稚園の母親は近所の友人から、保育所の母親は園の先生から情報を得ている

Q 現在、あなたは「お子様のしつけや教育」についての情報をどこから（だれから）得ていますか。

図6 しつけや教育の情報源（就園状況別）



注 複数回答。「その他」を含む21項目のうち、12項目を図示した。

★子育ての情報源について、子どもの就園先別にみると、幼稚園に通う子どもをもつ母親は、多くの項目で選択率が高い傾向がみられました。幼稚園の母親はより多方面からの情報源に接しているようです。中でも「近所の友人・知人」は4人に3人が選択しており、「自分の親」「配

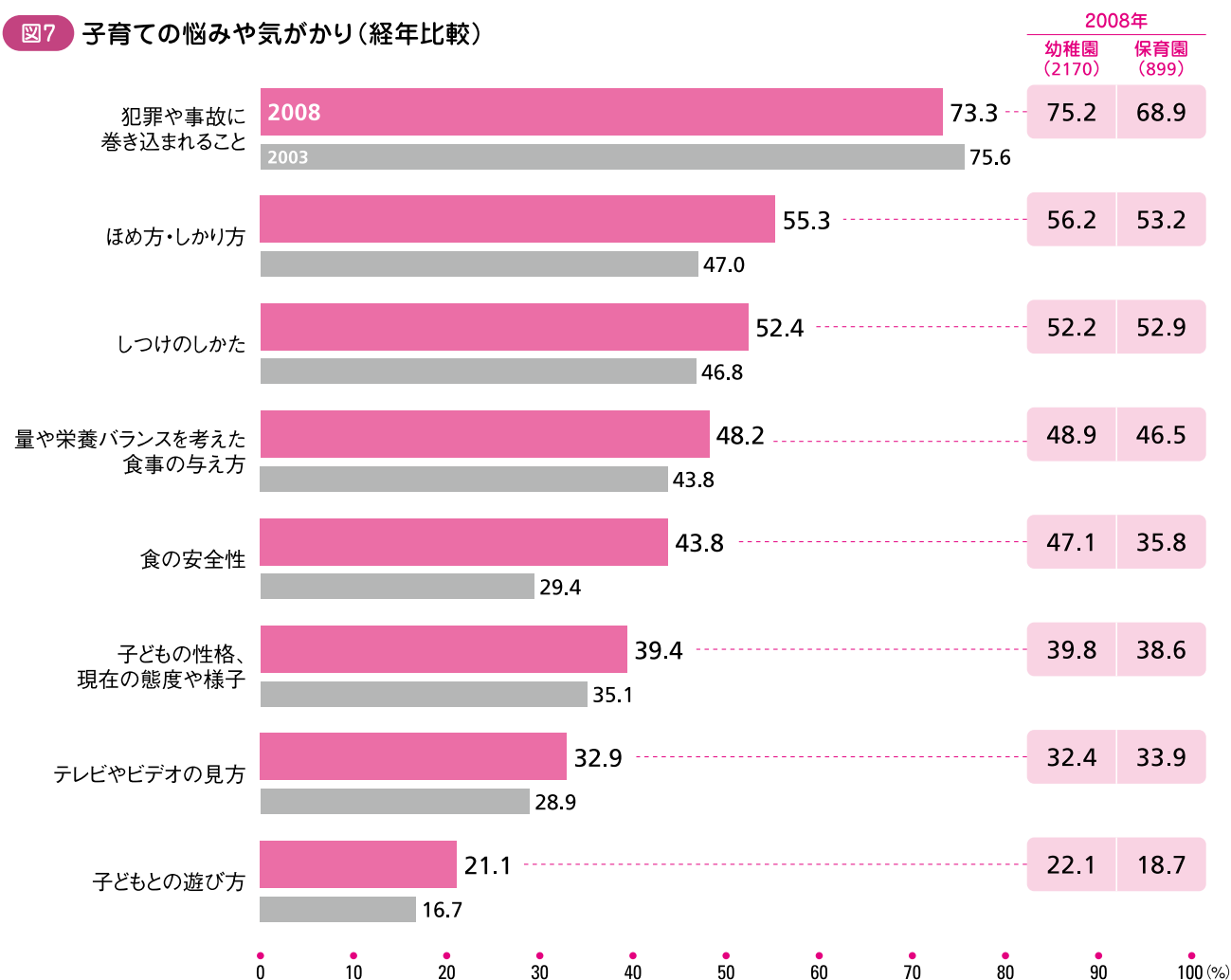
偶者」と続きます。一方、保育所の母親は「自分の親」（65.6%）がもっとも多く、「園の先生」「近所の友人・知人」と続きます。幼稚園と保育所の母親では子育てに関する情報源が異なることが分かりました。

子育ての悩みや気がかり

「食の安全性」への不安が高まっている

Q お子様やあなたご自身のことについて、次のような「悩みや気がかり」がありますか。

図7 子育ての悩みや気がかり（経年比較）



注1 複数回答。「その他」を含む45項目のうち、8項目を図示した。

★今回の調査では、5年前と比べて「食の安全性」を選択する割合が14.4ポイントも増加していました。近年の食に関するさまざまな報道を受けて、食に対する不安が高まっているようです。悩みや気がかりの中でもっとも多いのは、5年前と同様に「犯罪や事故に巻き込まれ

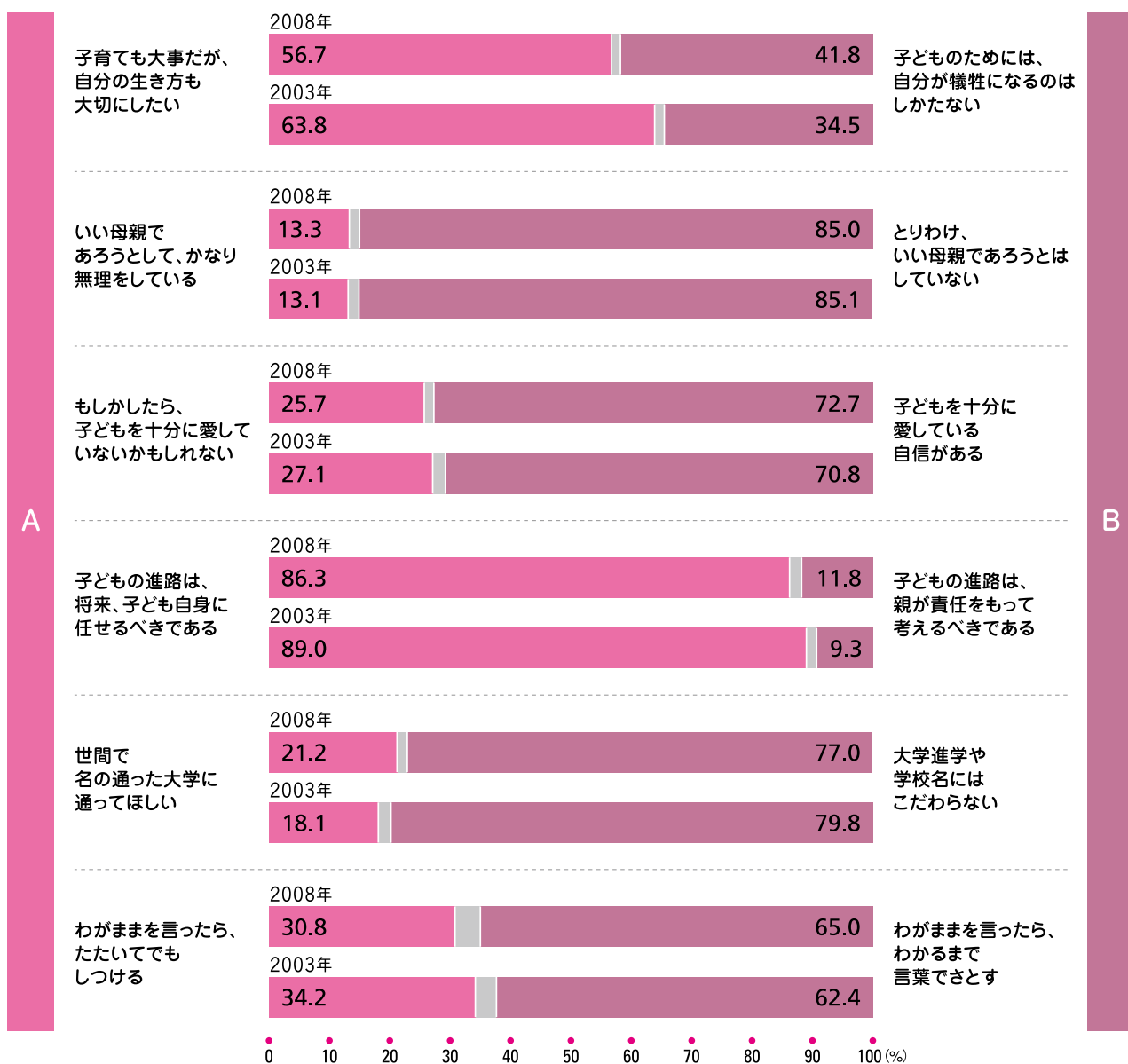
ること」で7割以上の方が選択しています。また、「ほめ方・しかり方」「しつけのしかた」は、ともに5ポイント以上増加していました。上位3項目は5年前の調査でも選択率が高いことから、幼児をもつ母親にとって変わらない悩みや気がかりと言えます。

子育てやしつけに関する意識

「子育ても大事だが、自分の生き方も大切にしたい」が減少

Q AとBの子育てに関する2つの意見のうち、あなたのお気持ちに近いほうはどちらですか。

図8 子育てやしつけに関する意識（経年比較）



注1 無答不明（グレーの部分）があるため、AとBの数値を合計しても100%にはならない。

注2 10項目のうち、6項目を図示した。

★2003年に比べて「子育ても大事だが自分の生き方も大切にしたい」と回答した母親が約7ポイント減少し、自分の生き方より子育てのほうを優先する母親が増えていることがうかがえました。また、「わがままを言ったら、

わかるまで言葉でさとし」（+2.6ポイント）「世間で名の通った大学に通ってほしい」（+3.1ポイント）と微増しており、全体的に子育てや子どもの教育に熱心な母親が増えていることがわかりました。

全国の保育現場からの声

私が考える
幼児教育のこれから

幼児教育の現場は今、大きな変化に直面しています。

少子化、共働きの増加、保護者の価値観の多様化、地域の教育力の低下などを受け、

幼稚園・保育所に求められる役割はますます大きくなっています。

また、この4月からは改訂幼稚園教育要領、

改定保育所保育指針もいよいよ実施されました。

さまざまな状況変化の中で、今後どのような幼児教育・保育が実現されるといのでしょうか？

幼児教育に携わるさまざまな立場のかたに、

お考えをうかがいました。

※掲載の順序は50音順です

公立 ● 幼稚園

東京都墨田区 墨田区立緑幼稚園

幼児、保護者、そして教師が
温かな人間関係の中で
生き方を学び合う

園長 荒木尚子

①人間関係が希薄になり、引きこもりやニートなどの問題を抱える現代、生涯教育の出発点にある幼児期の教育にこそ、しっかりとした人生の足固めとしての役割が求められています。生涯「夢」をもち「生きること」への喜びを素直に感じ取れる人間、さまざまな形で勤労意欲をもち、社会に貢献しうる人間の育成が大切だと考えます。どんな逆境に遭遇しても、社会の中で、自らの力で切り抜け、乗り越え、前進しようとする「力」こそ「人間力」として大切だと思います。そのためには幼児期に多様な体験を通して、主体的に自分自身の力を発揮し、友だちと協同の喜びを実感

- 設問
- ① 幼児を取り巻く環境の変化や、幼児期の教育・保育の重要性がますます高まっていることを踏まえ、今後どのような幼児教育、保育が実現されたらよいとお考えになりますか？
 - ② ①の実現に向けて、課題は何であるとお考えになりますか？
 - ③ 課題の解決に向けた、取り組みのポイントは何かあるとお考えになりますか？

※①～③全体をテーマとしてご執筆いただいた原稿は番号を記載していません

し、自己肯定感もてる幼児の育成を実現することだと考えます。

②人とかかわりが十分できない幼児や保護者が増えてきている現状では、幼児期に、一人ひとりが自信をもち、豊かな想像力と表現力を身につけていくことが困難な面もあります。将来、社会に役立つ人間として主体的に取り組む姿勢とコミュニケーション能力をはぐくむことが望まれます。

③そのためには、幼稚園という安心できる居心地のよい環境で、温かい人間関係の中で生き方を学ぶことが必要です。さらに、さまざまな年齢の人々とかかわり、自分の世界を広げていく経験も大切です。核家族化の中、保護者もほかの人々とかかわり方に迷ったり、敬遠したりする現状を考えると、幼児だけでなく保護者も共に体験を通して育成していくことが必要です。まずは幼児と保護者、教師と幼児、教師と保護者、幼児同士が互いを信頼し合いながらかかわりを深められる幼稚園経営を創造していくことだと考えます。そのうえで具体的な視点としては、一人ひとりに応じて適切に援助ができる教師の育成が大切です。また、幼稚園教育の重要性を広く社会に伝えていくために的確な自己評価を実施し、公表していくことも重要であると考えます。

公立 ● 保育所

東京都目黒区 ひもんや保育園

一緒に思いきり遊ぶ中で「子どもの内面を読み取る目」をもってほしい



園長 井上さく子

1日の大半を保育園で過ごす子どもが、安心・安全で楽しい環境にあるかを日々考えながら、子どもたちと向き合っています。まず、一番に考えていくべきことは、子どもの生活スタイルです。大人の都合に付き合わされることが多く、子どものリズムでゆったりと寛げる時間が少ないことに気づかされます。また、自分の気持ちを発信しても受け止めてもらえなかったり、時間がなくて断られたり、いつになったらよく・私の願いが叶えられるのかと心の叫びが聞こえてきます。子どもたちは、さまざまな要因を抱えています。そんな子どもたちにとってせめて保育園生活は、ほっ

とする居場所にしてあげたいと思っています。ありのままの自分を出せる環境を整えていくことが大人の役割になってくると思います。

次から次へと課題を提供していくことは簡単なことですが、立ち止まって見ると子どもたちはさまざまな角度から「もっと思いきり遊びたい」「癒されたい」といったシグナルを発信しています。大人は、自分のすることは自分で決めたいという子どもの基本的な願いをどれだけ受け止められているのでしょうか。また、一方では、体を使った遊びは疲れるからと輪の中から抜けていたり、ルールのある遊びは負けるから嫌いだからと、最初から入らなかったりする姿もあります。取り組む前から失敗を恐れずに、そこで学ぶことがたくさんあることを伝えていくことも大人の役割です。「人となり」を形成する幼児期にこそ、楽しいことも嫌なこともいっぱい体験し、積み重ねてほしいと思います。

友だちと一緒にいるだけでうれしい、楽しいと心から感じることができる子どもになってほしいと願っています。そのためには、私たち保育者が目に見えない「子どもの内面を読み取る目」をもつこと、遊びを通して子どもと一緒に体を動かし、おもしろさを伝えていくことが大事ではないでしょうか。

公立 ● 保育所

埼玉県越谷市 越谷市立蒲生南保育所

専門性を高め、子どもたちが育ち合う関係をつくる



所長 大沼順子

子どもは本来、自分が興味や関心をもったことに、挑戦したり体験したりすることが大好きです。保育所の中でも、子ども同士がのびのびと遊ぶ姿は輝いています。反面、なかなか自分を出しきれない子がここ数年で増えているように感じています。まだ、成長期の子どもが、思うようにできなかったり、失敗したりしたとき、否定されるのではなくいろいろな考えや思いを認め合える関係、そしてハンディの有無や、国籍の違いなども認め合い、育ち合える関係を乳幼児期からはぐくむことが必要だと思います。そのためには、子どもが安心していられる環境をつくり、「大丈

夫だよ」「あなたらしくね」とおおらかで豊かな人間性をもった子が育つ保育を実現していきたいと思っています。

これらを実現するには、保育士としての専門性を高めることが大切になると思います。

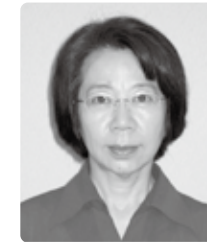
子どもをとらえるとき、今までの経験だけでなく、誕生から就学を見据えて子どもの育ちを援助できる力をつけることが必要です。集団保育の場であっても、一人ひとりの子どもの内面の育ちをとらえ、子どもの取り組もうとしている行動を理解しながら援助できる専門性を身につけることだと思っています。

保育所の全職員が、子どもを育てる保育所の役割と責任について共通認識をもち、子どもが子どもらしく育つことができるように、さまざまな職種の人の協力のもと、子どもと向き合って保育が展開できること。そして、これらの子どもの育ちの様子を、保護者と共に喜び合い、共感し合う関係、子どもを真ん中にして何でも話せる保育所をつくっていくことだと思います。

国立 ● 幼稚園

山形県山形市 山形大学附属幼稚園

保護者と保育の不易性を共有し生涯を見通した援助を



園長 小川雅子

①現代の情報化社会において、保護者の価値観や要望は多様化している。また、幼児の発達は個人差が大きく、一人ひとりに必要な援助も多様である。このような現状において、目先の情報に振り回されことなく、保護者と保育者が教育の不易な柱を共有することが大切である。そして、子どもの生涯を見据えた観点から、個人の能力の育成と公共的に生きる力の育成を目指した、柔軟で的確な保育が行われる必要がある。

また、幼稚園や保育所の運営については、職員間のコミュニケーションを大切にしながら効率的で効果的な組織運営の

検討を怠らず、常に新たな工夫や改善をしていく活力のある幼児教育の実践が求められる。

②a保護者や保育者の、幼児教育を語る「言葉」と、現実場面での「実践」との乖離が、さまざまな問題の要因となっていること。b母語習得期の子どもの言語環境において否定・制止・指示等の表現に、子どもにマイナスの暗示を与える言い方が多いこと。c保護者の正反対のニーズへの対応。

③a保護者も保育者も、方法論に振り回されると、子どもの心が見えなくなる。常に家庭や園における子どもの具体的な姿をもとに話し合い、生涯の発達を見通した適切な援助の工夫を共有することが大切である。世阿弥は幼少期の能芸の才能を「時分の花」と呼び、生涯かけて実現させる能芸を「まことの花」と呼んで区別した。幼児期の才能や問題を「その時分の花や課題」ととらえて、子ども自身に、生涯にわたって自ら探究していく態度を育てる援助の観点が重要である。

b保護者や保育者の言動は強い暗示力をもっていることを意識して、日常の言葉かけを吟味し、子どもがどのような自己認識を形成しているのかを敏感に察知する必要がある。

c子どもの生涯を見通した保育の観点を保護者と共有し、園や保育所の取り組みについては、学校評価を活用して常によりよい方策を探っていることを説明することが必要である。

私立 ● 保育所

東京都八王子市 共励保育園

保護者の協力を保育士が得ることで子どもたちは幸せになれる



理事長 長田安司

①文部科学省は、第5回幼稚園教育専門部会（2006.6.30）において「遊び集団や遊びの群れが持続性をもって、自分たちでグループをつくって活動していく能力が保育の中で非常に問われており、そのときに協同性とか協働するという能力がいかに幼稚園で育っているのかというのが非常に重要な意味をもっている。」と指摘した。

子どもは、3歳ごろまでは個々のイメージで遊ぶが、やがてあいまいながらもイメージの共有ができ始め、4歳には言葉を介して友だちとイメージを共有し、5歳になると集団で

の話し合いでイメージを膨らませることができるようになる。

共励保育園では運動会後の2カ月間は、自分たちのやりたいことを舞台で演じる劇遊びの期間として、連続的に活動に取り組むカリキュラムを組んでおり、子どもたちの協働する力を育てている。保育士は子どもたちの希望やイメージを聞きながら、集団での話し合いを引き出し、ストーリーの組み立てや小道具、大道具の製作など、子どもたちが自身で作上げたという「小さな達成感」を感じられるように援助する。

当然意見の衝突や活動上でのトラブルが発生する。そうした苦難を乗り越え、人を信じ、みんなで一緒に何かを成し遂げる楽しさを味わうことが大切なのである。「大好きなお母さんに自分の劇を見てもらいたい」という発表会の日は彼らにとって特別な日となる。当然ビデオ撮影は禁止である。

②こうした実践には、保護者の協力が不可欠である。共励保育園では、保育園の福祉的役割を前提にしながらも、入園時に「保育園は、親が子どもたちの成長を通し喜びや幸せを感じ、親としての役割の大切さを学ぶ場所」ということを説明している。保護者の協力を得ることができる保育士は幸せである。保育士が幸せでないと子どもたちも幸せにならない。

③解決への道程は、保育の本質を問い直し、「安易な保育サービス拡大」を見直すことから始まる。

私立 ● 幼稚園

鹿児島県薩摩川内市 **川内幼稚園**

あえてじっくりと、ぶれない軸を中心にした「子どもたちの園」で育てる



園長 **押野典生**

❶ 「軸がぶれない」。昨年末、よく耳にした言葉です。しかし、私たち日本人は流行に流されやすい、世論の風に敏感であるなど、良きにつけ悪しきにつけ、どうも周りのことが気になるようです。急激に進化したグローバルな世界に否応なしに突き進んでいった人間社会は、あたかも経済優先社会を席卷していくような気がしてなりません。そして、経済はもちろんのこと政治まで、ひいては教育の世界まで影を落としそうな勢いです。そのような中、幼児期の教育だけでもぶれずに、しっかりと基礎を培いたいものです。

❷ 「ぶれてはならないもの」は、その基礎という変わらない

真実です。見かけは強固な建物でもその基礎工事がしっかりしていなければ崩れてしまうことは、自然災害時にいやというほど見せつけられました。「見えないものに本物がある」ことを故東井義雄先生は「根を養えば樹はおのずから育つ」と言われました。「できる・できない」という競争社会の視点で子どもたちを育てようとする教育はよくない、とだれもが口を揃えますが、どうしても比べてしまう親や社会のあり方に、堂々と意見をする教育者は必ずしも多いとは言えません。知らず知らずに子どもたちを比較する言葉を発しているときもあります。その矛盾を勇気をもって正していくためには、集合体の協力が必要です。そのために、幼稚園や保育所にかかわる保育者の真剣な討議に加え、だれのための、何のための施設かを、再認識する眼を開いていくことが肝要です。

❸ 子どもたちの園であること。それは、すばらしいハード（施設や教材など）をつくるということではなく、人と人との関係を第一に考える「基礎づくりの幼児教育」を充実させることです。それは目には見えない教育ですが、混迷する今を乗り越える最上の近道であると思うのです。すぐに結果の出ることではなく、じわじわとにじみ出てくるものかもしれません。一朝一夕にできるものにいいものはないということ、それは人間の歴史が物語っています。

公立 ● 幼稚園

神奈川県秦野市 **秦野市立本町幼稚園**

幼児教育の本質をその質的な向上と共に広く伝えていきたい



園長 **木内清子**

❶ 幼児を取り巻く環境の変化や保育にかかわるニーズが多様化したことにより、子どもたちが教育や保育を受ける施設の形態もさまざまになりましたが、幼児教育の重要性が認識された今こそ、その質が問われ、幼児教育の理念を確実に実践していくことが求められていると思います。直接的・具体的な体験のできる幼児期にふさわしい生活を保障し、一人ひとりの体験や学びを豊かで確実なものにすること、特に、発達や学びの連続性の観点から、個の育ちと協同性の育ちを確実にして小学校教育に繋げていくことが必要であると考えます。

❷ 学校教育法の改正に見られるように、幼児教育がクローズアップされてはいるものの、一般的にはその本質についての理解がまだ十分とは言えない現実におつかります。「幼児の最善の利益」を最優先とした就学前教育の場としての体制づくりや幼児教育の望ましいあり方について、伝えていくことの難しさを実感しています。幼児の学びを確実にし、幼児の育ちの姿を通してその理解を得るためには、私たち教員が自己研さんを積み、豊かな教育を実践することであると認識しています。

❸ 学校評価の確実な推進によって、自らの運営や教育実践について振り返るとともに、課題や目標を明確にして取り組み、その質を向上させることであると思います。

また、幼児教育の質の向上は私たち教員の力量にかかっていることではありますが、教員養成機関のあり方、研修のあり方を始めとして、スタートを切ったばかりの特別支援教育の実践体制の整備や、学級の理想的な園児定数の考え方など、幼児教育を取り巻く環境の整備がなされることが望まれると考えます。

私立 ● 幼稚園

横浜市神奈川区 **幸ヶ谷幼稚園**

子どもを育てる一員として「子育てしやすい町づくり」に参加したい



副園長 **木元 茂**

❶ 日々繰り返される悲惨な事件を見るにつけ、情愛に溢れた家族の絆づくりが、これからの幼児教育を考えていくうえで大きなポイントになると思う。幼いころ、家族の絆が希薄なために心の安定を得られず、不安定な精神状態で育ち、他者とのかわり方がへたなまま大人になることが好ましくないのは明らかである。さらに、心の不安定な子が親になり、また孤独な中で子育てをしていくのは、見るに忍びない。

❷ よりよい家族の絆を築くためには、まず親の立ち位置を、もう少し子ども寄りに変える努力が必要である。ワークライ

フバランスと叫んでも、父は深夜まで働き、女性の社会進出と称して母も労働力と考えられる。一方、家庭の中でほかの者が替わるができない「父と母」。当然子どもは自分の生活環境を選べない。ジレンマを抱え親子共々途方に暮れているのが現状である。さらに、その家族が住む地域のつながりも弱まっている。今や公園は誰が遊んでいるのか、町内会館は誰が使っているのか。

❸ 今、重要なことは、子育てしやすい町をつくることである。その地域にある、生まれてから小学校卒業ごろまでの育ちにかかわる施設・団体が、一堂に会して企画を出し合い横断的に連携していくべきである。行政の所管の都合や、幼・保の個々の立場からではなく、子どもを実際に抱えている側の視点から資源を活用できるようにすべき時期にきている。

父、母の不在の際にショートリリーフを頼めて、家族をフォローできる地域の子育て応援団として、町内会や町内会館が役割を果たせないだろうか。行事のための子ども会ではなく、子育てのための親子支援チームとしての新子ども会。父と母の代わりに、人として必要な《絆》という名の愛情を地域の皆さんからおすそ分けしてもらおう。もらった愛情は、将来自分もおすそ分けのお手伝いをすることで、地域に還元すれば、絆はさらにつながっていく。

保育者養成大学

東京都北区 **東京成徳大学子ども学部子ども学科**

幼児教育の本質は子どもの暮らしにあることを胸を張って主張したい



准教授 **塩谷 香**

幼稚園教育要領改訂、そして保育所保育指針が同時に改定という大きな節目を迎えた幼児教育について考える機会をたくさんいただいた。保育所では「保育課程って?」「要録ってどう書いたらいいの?」などなど多くの戸惑いや疑問が聞かれる。私自身もどのように現場の先生方や学生に伝えればいいのかと迷いがあった。そう思いながらまた昭和23年刊行の「保育要領」を見直してみた。はるか昔学生のころ学んだ記憶がうっすらとある。改めて見てみると、驚くことばかりである。素直に感じることは、私たち大人が目指すものは「子どもの幸せ」なのだということである。

幸せな成長を遂げ、幸せな社会の一員として幸せな大人になること、それがあらゆる教育の目的なのだと改めて思う。

「教育基本法に掲げてある教育の理想や、学校教育法に示している幼稚園の目的や、その教育の目標や、教育の一般目標など、こうした社会の要求をはっきりわきまえ、その実現につとめなければならないと同時に、この目標に向かっていく場合、あくまでも、その出発点となるのは子供の興味や要求であり、その通路となるのは子供の現実の生活であることを忘れてはならない」（昭和23年保育要領「まえがき」より）。

保育所は、まさに子どもの生活をその家庭ごと引き受ける場である。長い1日の中に子どもの現実の生活が流れている。だからこそ、幼児教育の本質を見失ってはならない。子どもの暮らしの中に教育がある。保育者は自信をもってそのことを社会に発信してほしい。これが私たちの考える幼児教育ですと胸を張って主張してほしい。そのためにも保育課程があるのではないかと私は考えている。この改定を期に今までの実践を振り返りながら、目指す幼児教育とはどんなことなのか改めて考え、そして発信していただけることを期待している。

私立 ● 保育所

千葉県富津市 わこう村和光保育園

地域、子ども、保護者、保育者によるコミュニティ民主主義の実現を



園長 鈴木眞廣

①人間同士や自然とのかかわり合いが弱くなってしまった現代社会にあって、「コミュニティ民主主義」の実現を目指したい。つまり、子育てを通して、親や保育者だけではなく、地域のいろいろな人が子どもとかかわり、それぞれの出番があって大切にされる「群れ」をつくることである。それは、改定保育所保育指針でも、大人も子どももかかわり合い、学び合ってともに生きていく「生活の場」としての保育所の役割が強調されていることにもつながると思う。幼児期に多くの人の温かい眼差しが自分に注がれ、大人に押しつけられるのではなく、自分たちで選び決められ

るような経験をどんどん増やしたいと思っている。

②現代では社会の仕組みが高度になり、便利な反面、子どもたちにとって生活やものづくりの本質が見えにくくなっている。だからこそ、素材に人間が直接かかわることで、暮らしに必要なものを生みだす生活を園が用意したい。また、保育がサービス化する傾向がある中、園が何でも抱えようとするのもよくないのではないだろうか。親は子育てをしながら一緒に育つ。親から子育てを引き取るのではなく、親と子が向き合うことを園が支えていきたい。

③まずは親や地域に働きかけ、一緒に考える仲間を増やすこと。乳幼児期に地域と親がしっかりつながることで、子どもはその環境の中で安心して遊び、成長できる。

例えば保育士も、ある人は絵を描くのが得意、ある人は子どもたちと遊びを見つけるのが得意など、得意分野が異なる。それぞれの足りないところは補い合い、保育士だけで足りないところは家庭や地域に力を借りる、という考えで関係をつくってあげたいと考えている。私の園では力仕事で得意な父親たちに毎年手作りプールを作ってもらっている。子どもたちの「パパが作ったプール！」と喜ぶ様子を見ると、親や地域の人たちが自然に園に入れる必然性をつくることも園には求められているのではないかと感じる。

私立 ● 幼稚園

京都市中京区 光明幼稚園

「幼児期の知性」とは何かを問い、真の子育て支援に取り組む



園長 田中雅道

財団法人全日本私立幼稚園幼児教育研究機構副理事長

“幼児期にはぐくまれるべき知性とは何か”。前回・今回の幼稚園教育要領改訂、今回の保育所保育指針改定に委員としてかかわるとともに、幼稚園長という立場で幼児教育に携わる者として最も大切にしてきた課題です。

パソコンが普及し、特に事務系の仕事の内容は大きく変化しました。従来、会計処理やデータ整理など、単純だけでも専門性が要求される職種が会社の中にありましたが、現在ではその多くをパソコンが行います。また、インターネットが急速に普及し、日常生活が外国と結びついたものとなりました。単純作業の多くは、外国の労働力と比較される時代に

なったのです。その中で、これから百年先も日本が輝き続けるために、“幼児期にはぐくまれるべき知性は何か”は最も重要な課題です。

幼児教育は、環境を通して幼児の内発的な動機づけを誘発するとともに、生活を通して幼児自らが周囲の事象を体系化していく過程を大切にしています。生涯教育の基盤を培うという意味はここにあります。日本国民として最低限獲得しなければならない課題を学習することが重要視される義務教育とは、本質的な教育観が異なります。そのことをお互いが理解したうえで、一人ひとりの子どもにとって一番スムーズな接続は何か、保幼小連携の最も重要な課題です。

核家族化、少子高齢化が進み、家庭を取り巻く環境の変化が、子育てへの閉塞感を強めています。子どもの養育の第一義的責任は家庭にあります。社会で子どもを育てるという意識がはぐくまれないと親がつぶされてしまいます。幼稚園の新しい役割として、親が親として育つための支援活動として“子育ての支援”が盛り込まれています。“子育て支援”という名目で、子どもと親が向き合わない時間を多くする方向の従来の政策では、人は人としての幸せを感じることができません。子どもの成長とともに親も育つという、人間本来の命題に即した活動がこれからの幼稚園に期待されています。

保育者養成大学

愛知県丹羽郡 名古屋芸術大学人間発達学部子ども発達学科

不自由さや無秩序の中で生きる時間を子どもたちに取り戻す



教授 田邊光子

①生活のすべてが効率的で、最短距離で目標にたどり着くように求められる現代の子どもにとって、健やかに成長していくために必要なことは、何であろうか。

ひとつには、人とかかわり人間関係を築いていく体験を十分重ねることである。相手を傷つけたり、ズルをしたりして自分を振り返ったり、葛藤やつまずきを乗り越えたりし、共感し合える関係を築くことが大切である。そうした体験を通して初めて、よいことや悪いこと、守らなければならないことなどを一つひとつ心に刻み自分をつくっていくのである。

ふたつめは、自然とかかわる体験を十分することである。

木の肌に直接触れたり、雑草の中の生き物を探し回ったり、多少の危険も含む中で、子どもが本来もっている好奇心や探究心を満たし、発見する喜びや知る喜びを味わえるような体験を重ねたい。その中で子どもは、自分の意のままにならぬ自然を相手に、人間として生きていくために必要な力を獲得していくのである。

②これらの実現に向けての課題のひとつは、今社会の中で子どもが経験できにくくなっている発達に必要な体験、特に、一見マイナスと思われるような体験を見直し、子どもの発達についての理解を十分深めることである。

ふたつめは、子どもが生活する環境がいつの間にか、危険やつまずき、困難さを取り除き、画一的になっていないかということである。時間がたつのも汗が流れるのも忘れ、全身を使って遊びに没頭できるような環境づくりが必要である。

③これらの課題を解決していくためには、周りの大人が、子どもに関心を持ちながらも、子どもが直面している世界を整理しすぎないことである。子どもが「子どもの世界」の中で「思いっきり体験」できることを重視していくことである。

そして、それができる時間と場を保障すること、子どもの生活の中に多少の不自由さや無秩序さなどを取り入れていくことである。

私立 ● 保育所

茨城県東茨城郡 飯沼保育園

家庭養育力が低下する中多様な保育サービスの拡充が求められる



理事長 東ヶ崎静仁

①今までの幼稚園・保育所は家庭の養育力を前提に教育・保育を担当してきました。しかし、現在の親世代は兄弟が少なく、核家族で育ち、家庭集団での育ちが不足しています。今後さらに女性の就労が期待される中で、家庭養育力の低下は避けられません。

子どもを取り巻く環境は、家庭生活の不規則によって、食事・遊ぶ・睡眠などの生活リズムの確立が困難になっています。親子の触れ合う時間が短くなり、親として「子どもの育ち」を意識する環境が一層かけ離れてきています。

子ども同士が育つ（遊ぶ）機会が欠落し、子どもを自分で

育てたい親が、子育て中の交流や悩んだ時の相談もできません。親子共に安全・安心した保育サービスが求められます。

②教育とは、子ども同士が遊び、遊びを通した経験・体験によって達成感・満足感を知り、失敗によって解決方法を知ることが「学び」となります。「子育て」は子ども集団が重要で、その環境を整えることが急務です。

しかし、現行の幼稚園では低年齢児が利用できず、保育所では「保育に欠ける」入所要件に該当しなければ利用できません。子どもだれもが利用できて、子育て支援機能が備わる認定こども園も増えていません。

③幼稚園・保育所を誰もが利用できるようにすることが望ましいですが、認定こども園を幼稚園・保育所がもっと取り組みやすくすることで量的拡大につながります。そして、都市部での待機児童解消や地方での人口減少地域で、施設をもたない家庭的保育など小規模保育サービスの検討をすべきと考えます。

多様な保育サービスの量的拡大を図るには「安全・安心」がキーワードとなります。親子で集団に参加できる子育て支援センター機能は子育て家庭に安心を与え、保育所機能は就労と子育ての両立支援、子どもの育ちの保障につながります。

保育園に子どもを預けて働く親のネットワーク

保育園を考える親の会

現代の幼児教育の課題を保護者に伝える役割も保育者は担っている



代表 普光院亜紀

❶子ども同士のかかわり 大家族や地域、子どもの集団の中で、さまざまなかかわりを通して自然に育っていた部分が、少子社会、核家族化、地域関係の希薄化の中では、育ちにくくなっており、保育園でも幼稚園でも、この点を意識して補っていく保育が求められています。つまり、けんかも大切な育ちの機会と考えて、子ども同士の主体的なかかわりを大切にしていけるような保育です。意志疎通すること、共感すること、相手の思いや感情を理解すること、役割分担をすること、責任を果たそうとすること、参加することと一緒にやり遂げることの楽しさを、この時期に十分に体験

しておくことが、その後の社会性の育ちにつながるのだと思います。これは、家庭では提供できない教育環境です。

❷体を動かすこと 8歳までに基本的運動のための神経回路がおおむね完成されることを考えると、体を動かすことは、もっと重視されていいと思います。日本の住宅事情では、家庭では飛び跳ねることも禁じられていますので、園環境は重要です。園庭で自由に体を動かして遊ぶ子どもの運動量と運動の多様性を見ると、遊びによる運動の重要性を感じます。

❸保護者の理解、そして、支援 しかし、このような幼児教育の課題は、保護者には、あまり理解されていません。学校の授業のようなものを幼児教育と考え、それを求める保護者も多いと思います。保育園や幼稚園は、保育のねらいや子どもの発達について保護者にも伝え、この時期に本当に必要なことを保護者に理解してもらう必要があると思います。けんかやどろんこ遊びについてクレームがくるという話も聞きますが、これからは、就学前教育の専門家として、きちんとした説明や計画の提示ができることが求められます。また、核家族の家庭の中には「社会」がないので、生活習慣をはじめ、いろいろなことを子どもが身につけることが、より困難になっていることを感じます。家庭の環境は、以前とは違うことを理解し、家庭を支援していただくことが必要だと思います。



ベネッセ次世代育成研究所からの発刊物のご案内

これからの幼児教育を考える



2008 夏

特集 幼稚園教育要領改訂のポイント

◎2008年3月に告示された幼稚園教育要領改訂のポイントを解説。また、幼稚園における子育て支援の実態について、ベネッセ次世代育成研究所が行った調査の結果や現場の実践例を紹介しています。

A4判 24ページ



2008 秋

特集 幼稚園教育要領改訂を日々の保育にどう生かす?

◎幼稚園教育要領の改訂を受け、現場ではどのようなことに留意して保育を展開していくとよいでしょうか。「規範意識」「協同して遊ぶ」という改訂のキーワードを解説する実践紹介も掲載しています。

A4判 24ページ



2009 春

特集 幼小連携の充実に向けて現場が取り組むべきこと

◎改訂幼稚園教育要領でも強調された「幼小連携」について、調査より明らかになった現状や実践例を紹介しています。座談会では小学校が幼稚園に期待することを取り上げました。

A4判 24ページ

上記の刊行物はすべてホームページからご覧いただけます。

各種検索エンジンで「ベネッセ次世代育成研究所」と検索してください。

ベネッセ次世代育成研究所

検索

<http://www.benesse.co.jp/jisedaiken/>

幼稚園教育・保育に関する発刊物

第1回 幼児教育・保育についての基本調査(幼稚園編)速報データ集



◎全国の国公立幼稚園の園長・管理職を対象に、幼稚園での教育的な活動や子育て支援の実態を明らかにした調査のデータ集

A4判 88ページ



第1回 幼児教育・保育についての基本調査(保育所編)速報版

◎全国の公私立保育所の所長(施設長・園長)、管理職を対象に、改定保育所保育指針への対応と保育所における保育の実態・課題について明らかにした調査の速報版

A4判 20ページ



幼児の遊びにみられる学びの芽

◎4、5歳児の遊びの事例を59サンプル収集し、遊びに含まれる学びの可能性や保育者のかかわりを分析しました。

A4判 72ページ



保育所での子どもの発達と保育のポイント

◎0歳から就学前までの子どもの成長発達と保育者のかかわりや、幼児の言動の意味と援助のポイントをまとめました。

A4判 112ページ



編集後記

今回の号では、公私立・幼保の枠組みを超えて様々な角度から「幼児教育」についてのご意見をご紹介しました。その設立背景や歴史の違いから、幼稚園と保育所では強みとする点も異なるのでしょう。しかし、それぞれのよい点をまずは認め合うことが、子どもたちのよりよい環境を考えるきっかけになるようにも思いました。この情報誌がそのようなきっかけの一助になれば幸いです。(杉田)

「これからの幼児教育を考える」2009夏号

2009年5月20日発行

発行人 新井 健一
編集協力 (有) ペンダコ
編集人 後藤 憲子 執筆協力 二宮良太
印刷・製本 (株) 協同プレス 撮影協力 ヤマグチイキ
企画・製作 ベネッセ次世代育成研究所
(株) ベネッセコーポレーション
発行所 〒101-8685 東京都千代田区神田神保町1-105 神保町三井ビルディング

次号予告

これからの 2009 Autumn 秋 幼児教育を考える

次号は2009年9月下旬発行(予定) 年3回の発行(予定)です